

令和5年12月発行

一年の終わりである師走。園によっては、発表会やクリスマス会などの行事もあり、文字通り走り回るような忙しい毎日をご過ごしておられることと思います。大晦日の夜は「今年も頑張った自分」をおおいに褒めてあげましょう。そして「来年挑戦したいこと」などミカンでも食べながら考えてみるのもいいですね。皆様、どうぞよいお年をお迎えください。

### 放虎原こども園公開保育(11月15日)

さわやかな秋晴れのもと、小学校などからも合わせて50名の先生方にご参加いただきました。参観後の協議会では、この日に至るまでの子どもたちの姿や保育者の意図について、5歳児担任の斉藤尚子先生から説明があり、その後、グループに分かれて協議を行いました。

学校教育課の指導主事、入口瞬先生より「人との信頼関係を築くことが全ての教育の土台。学びはつながっている。幼児期の学びの芽生え、児童の自覚的な学びとのつながりを意識しながら、遊びを展開したり授業を工夫したりしてほしい」と幼保小連携・接続の視点から指導助言をいただきました。互いの教育・保育を振り返ったり、幼児教育と小学校教育のつながりを考えたりなど、実り多い1日となりました。

#### 『みんなのゆうえんち』をつくろう！！

運動会に向けての取組後、5歳児を中心に運動会ごっこが数日続きました。運動会ごっこが下火になってきた頃、保育者は運動遊びの経験を更に広げ、協同的な関わりを深めて欲しいという意図をもって、園庭に巧技台やフープやロープなどの環境を用意してみました。遊ぶだけではなく、保育者は毎日の遊びの振り返りの時間も、とても大切な環境構成のひとつとして捉えています。その中で5歳児は「小さいお友達も楽しく遊べるように名前をつけよう」「看板を作ったらいいよね」「スタートやゴールの印があるとぶつかったりしないかも」などなど、考えを出し合いながら発展させていきました。子ども自身が遊びの中で必要感をもって、文字にふれたり数を数えたりなどの環境も意図してつくっています。



看板をつくらう。  
ぼくは『み』をかくな。



スタートとゴールをわかるようにしましょう。

#### 『やってみたい!』『やってみよう!』が生まれる環境づくり

放虎原こども園では、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の具現化に努めています。発達段階に応じた各学年の育ちを踏まえつつ、子どもの「やってみたい!」「やってみよう!」が実現できるように興味・関心を捉えながら遊びの環境を子どもと共につくっていきます。子どもたちが、自分たちで楽しく遊びを発展させていくために、気づきを伝え合う機会をつくったり、失敗しながら試行錯誤を繰り返す場や時間を保障したり、友達とぶつかったりしながらも折り合いをつけられるように仲立ちしたりなど、自分たちで遊びや生活を進めていく手応えを感じ、自信をもって生活できるように働きかけています。

## ドキュメンテーションで「遊びの中の学び」を可視化しよう

運動会ごっこを通して、子どもたちは心身を十分動かして遊んできました。そこでもっといろいろな運動遊びを通して、自ら心身を動かす心地よさ、友達と挑戦する楽しさを感じてほしいと願い、環境づくりに務めています。

自己発揮が十分にできるようになると、周りにも目が向くようになります。小さいお友達にも優しく接し、喜んでもらえるとうれしく感じられます。異年齢児との関わりが、あちこちで見られます。



友達の姿に刺激を受けたり、友達同士で励まし合ったり、苦手なこと、出来ないことにも「やってみよう」という気持ちを認め、支えています。それが、その子の自信につながると願いつつ関わっています。

大きいお兄さん、お姉さんの姿を見て、1, 2歳児さんもチャレンジ!! まねっこすることから、遊びの楽しさ、面白さを感じるにつながっています。

幼児教育は「見えない教育」だと言われます。保育者が子どもの経験を読み取って次の保育につなげる「経験カリキュラム」と言えるでしょう。保護者や地域には、子どもの行動だけではなく、保育者が子どもの育ちにおいて何を願って環境を構成しているのか、子どもが主体的に遊ぶ中で「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」とあわせて、遊びの意味と重要性を伝えていきたいですね。

## 笑顔いっぱい 楽しく遊んでふれあおう(11月2日)



子育てアドバイザー、幼児教育・家庭教育専門家の熊丸みつ子先生の笑いあり涙ありの講話と楽しい実技で、あっという間の2時間でした。

子どもと向き合っていると、思い通りにならないことも多く、ついイライラしてしまうこともあります。熊丸先生は、私たちが抱えるそのような思いを丸ごと受け止め「順調よ!」と励ましてくださいました。明日からまた頑張ろうと思える研修会でした。



### ～ポジティブ応援団～

## 子どもの主体性を支える基盤は「安心感」

先日『保育実践充実推進のための中央セミナー』に参加した際、武庫川女子大学教授の倉石哲也先生の人権についての講演の中で、次のようなお話がありました。

自立とは…自分の力で出来るようになること

出来ないことを人に頼れるようになること

\* 子どもは、思い通りにならない「つまずき」を様々な場面で体験しています。親から叱られたり、友達とけんかしたり、少しばかりシビアな体験もしています。その時は言い訳を並べて、人の責任にし、イジイジし、泣くこともあります。このようなネガティブな体験をしている際、子どもたちの支えになるのは誰でしょうか？

\* 子どもにとって誰かに支えてもらえる、支えとなる安心感が、少しばかりシビアな体験をやり過ごす(立ち向かう)ために必要なのではないのでしょうか。

愛着の視点から見ると、子どもが、泣いたり、癇癪を起こしたり、駄々をこねたり、衝動的になったりする行為は、日常的に関わる大人との間で、情緒的な安定を取り戻そうとする行為だと言われます。「失敗しても大丈夫」「間違いは誰にでもある」など子どもの不安な気持ちに共感的に寄り添いながら、子どもの“できない”を保障していくことが、周囲の人や自分への信頼感を育てるベースとなっていきます。とは言っても・・・それらを受け止めることが難しく悩むことも多々ありますよね。まずは基本に立ち返り、一人一人の子どもの“安心”とは・・・安心感から生まれる子どもの姿をイメージし、関わりを振り返ってみたいと思いました。